

菅沼健太郎（金沢大学）

要旨

Hayes (1995) や Zec (2011) では、閉音節 (C)VC における尾子音が 1 拍 (μ) を担うかどうか、すなわち (C)VC が (C)V μ C μ という 2 拍であるのか、(C)V μ C という 1 拍であるのかについて以下の 3 点が述べられている。i. 尾子音が 1 拍を担うかは言語によって異なりうる。ii. 尾子音が 1 拍を担うかは尾子音の聞こえ度によっても異なる。iii. 言語によっては音韻環境にも依存し、ある音韻環境では尾子音が 1 拍を担い、ある別の音韻環境では尾子音が 1 拍を担わないとみなせる言語もある。

このような記述を踏まえつつ、本発表では富山県富山市方言の動詞アクセントを扱う。そして、富山県富山市方言における促音（すなわち音節末阻害音、Q で表す）は少なくとも動詞アクセントという形態音韻論の中では 1 拍を担っていない、すなわち (C)VQ が 1 拍であると考えられること、そしてそのように仮定することで同方言の動詞アクセントが簡潔に説明されることを示す。

1. 尾子音の拍性

Hayes (1995: 52, 120, 125, 138-139 他) や Zec (2011) では、閉音節 (C)VC における尾子音が 1 拍 (μ) を担うかどうか、すなわち (C)VC が (C)V μ C μ という 2 拍であるのか、(C)V μ C という 1 拍であるのかについて以下の (1) に示す 3 点が述べられている ((1a, b) の言語例は Zec (2011) から引用)。

- (1) a. 尾子音が 1 拍を担うかは言語によって異なりうる。
- i. (C)V μ C μ という 2 拍である言語 例 Classical Arabic, English
 - ii. (C)V μ C という 1 拍である言語 例 Buriat, Aguacatec Mayan
- b. 尾子音が共鳴音 ([+son]) であるか、阻害音 ([-son]) であるかという聞こえ度によっても異なる。通言語的に、ある言語で阻害尾子音が 1 拍を担うならその言語では共鳴尾子音も 1 拍を担うという含意関係がある（換言すれば両者のうち共鳴尾子音のみが 1 拍を担う言語はありうる）。
- i. (C)VC_[+son] と (C)VC_[-son] がともに 2 拍である言語 例 Classical Arabic, English
 - ii. (C)VC_[+son] が 2 拍で (C)VC_[-son] が 1 拍である言語 例 Kwakw'ala
 - iii. (C)VC_[+son] と (C)VC_[-son] がともに 1 拍である言語 例 Aguacatec Mayan
- c. 言語によっては音韻環境にも依存し、ある環境では尾子音が 1 拍を担い、ある別の環境では尾子音が 1 拍を担わないとみなせる言語もある (Hayes 1995: 52, 120, 125, 138-139 他)。
- 例 i. Palestinian Arabic では (C)VC は通常 2 拍だが、語末の (C)VC は 1 拍である。
 - ii. Cahuilla では通常 (C)VC は 1 拍だが、intensification (強調化) という形態音韻論的な操作によって形成される (C)VC は 2 拍である。

Hayes (1995) と Zec (2011) はともに、「アクセントパターンを簡潔に説明するために、この言語では尾子音が拍を担っていると仮定し、この言語では拍を担っていないと仮定する」という形で議論を進めている。すなわち拍を担う、担わないという「拍性の有無」に関して彼らは独立した証拠を示して

いるわけではない。その点でこれらの研究には問題がある。しかし、このように仮定することでアクセントパターンを簡潔に説明できることもまた事実であるため、本発表では一旦彼らの考えを受け入れたうえで議論を進めることにする。(1) に示した彼らの考えが正しいとしたうえで、日本語諸方言、例えば東京方言に関する記述 (McCawley 1968: 131 など) をみると、東京方言は共鳴尾子音である撥音 (N) と阻害尾子音である促音 (Q) がともに 1 拍を担う体系とされている。しかし、(1) の 3 点はこれとは異なる体系をもつ方言の存在を示唆する。本発表では富山県富山市方言 (以下単に富山市方言と表記する) がその異なる体系をもつ方言であることを示す。具体的には、富山市方言における促音は少なくとも動詞アクセントという形態音韻論の中では 1 拍を担っていない、すなわち (C)VQ が 1 拍であると考えられること、そしてそのように考えることで同方言の動詞アクセントが簡潔に説明されることを示す。なお、同方言の動詞アクセントでは阻害音である促音は 1 拍を担わない一方、共鳴音である撥音は 1 拍を担うと考えられる。これは (1b) で述べた内容に合致するものであり、通言語的特徴に逆らうものではない。

2. 富山市方言のアクセント体系

富山市方言は以下の (2) に示すように、高低音調を生み出す下がり目 (’ で示す) の有無とその位置が弁別的な言語である (平山 他 1998: 10)。この点で富山市方言は東京方言に類似する。ただし以下の (3) に示すように下がり目の有無が弁別的になるのは名詞だけである。動詞 (およびここでは省略するが形容詞) は (3)、および (4) に示すように全て下がり目をもつ有核語であるため下がり目の有無は弁別的ではない (平山 1960: 27-67、平山 他 1998: 11)。

(2) 富山市方言の名詞のアクセントパターン (3 拍語の場合)

- a. 下がり目無し (平板) クルマ
- b. 1 拍目に下がり目有り (頭高) ナ’ミダ
- c. 語中に下がり目有り (中高) トカ’ゲ
- d. 語末に下がり目有り (尾高) オトコ’

(3) 下がり目の有無

- a. 名詞では弁別的である。 ハ’シ “箸、橋”、ハシ “端”
- b. 動詞では弁別的ではない。 ヨ’ンダ “読んだ”、ヨ’ンダ “呼んだ”

(4) 東京方言と富山市方言の動詞の対比：東京方言では“する、知る、遊ぶ”は無核語であるが、富山市方言では全ての動詞が有核である。

	する	知る	遊ぶ	見る	読む
a. 東京方言	スル	シル	アソブ	ミ’ル	ヨ’ム
b. 富山市方言	ス’ル	シ’ル	アス’ブ ～アソ’ブ	ミ’ル	ヨ’ム

3. 富山市方言の動詞形態論とアクセント

3.1. 動詞形態論

本発表に関連する限りで言えば、富山市方言の動詞形態論はいくつかのケースを除けば概ね東京方言と同じと考えてよい。まず動詞語幹は 3 種類存在する。この 3 種類とは、語幹末が母音である母音語

幹、語幹末が子音 (/t, r, w, n, m, b, k, g, s/ のいずれか) である子音語幹、活用に応じて語幹が交替する変格活用語幹 (/ku-/ “来る”、/su-/ “する” の 2 つのみ) のことを指す。そして接尾辞は初頭音を欠いた異形態があるかどうかにより 2 種類に分かれる。例えば非過去形接尾辞 /-ru/ は /kam-u/ “噛む” のように初頭音を欠いた異形態 /-u/ が存在する。その一方で、過去形接尾辞 /-ta/ は /mi-ta/ “見た”、/kaN-da/ “噛んだ” のように有聲性の違いによる異形態はあるものの初頭音を欠いた異形態は存在しない。/-ta/ と同じ振る舞いをする接尾辞としては他に副動詞形接尾辞 /-te/、条件形接尾辞 /-tara/ などがあり、全て初頭に /t/ をもつ。本発表ではこれらの初頭に /t/ をもつ接尾辞をまとめて T 系接尾辞と呼ぶことにする。この T 系接尾辞は語幹に接続する際、種々の音交替を引き起こす。その音交替は以下の (5) に示すケースを除けば東京方言と同じである。

- (5) a. /w/ で終わる語幹：ウ音便が生じる。例 /kaw-/ “買う” → /koo-ta/ “買った”
 b. /s/ で終わる語幹：語幹によって差異がみられ、イ音便が生じるものと、東京方言同様単に /i/ が挿入されるものがある。この差異については小西 (2016: 251-252) に詳細が述べられている。
 例 /das-/ “出す” → /dai-ta/ “出した” (イ音便が生じる。)
 /kos-/ “越す” → /kosi-ta/ “越した” (/i/ が挿入される。)

本発表では以下の (6) に示すように /t, r/ で終わる語幹と /n, m, b/ で終わる語幹に T 系接尾辞が接続する際、それぞれで促音便と撥音便が生じる点が重要となる。本発表ではこれ以降 (6a) の語幹を (C)VQ 語幹、(6b) の語幹を (C)VN 語幹と呼ぶ。

- (6) a. /t, r/ で終わる語幹 ((C)VQ 語幹)：促音便が生じる。
 例 /tat-/ “立つ” → /taQ-ta/ “立った”、/sir-/ “知る” → /siQ-ta/ “知った”
 b. /n, m, b/ で終わる語幹 ((C)VN 語幹)：撥音便が生じる。
 例 /sin-/ “死ぬ” → /siN-da/ “死んだ”、/yom-/ “読む” → /yoN-da/ “読んだ”、
 /yob-/ “呼ぶ” → /yoN-da/ “呼んだ”

注 1 これらの語幹の末子音に関して、厳密にいうと末子音が /Q/ や /N/ となるような派生段階は存在しない。これらは諸規則を通して /t/ や /n/ になる。ここではあくまで当該箇所を視認しやすくするために /Q/, /N/ と表記している。

3.2. 母音語幹、(C)VQ 語幹、(C)VN 語幹に T 系接尾辞が接続した際のアクセント

本発表のデータは以下の 3 名の方言母語話者から得たものであるが、その結果は小西 (2016: 94-95, 143) で述べられているものと同じになった。

- (7) A 氏、女性、1936 年生まれ、富山市出身、富山市在住。
 B 氏、女性、1957 年生まれ、富山市出身、富山市在住。
 C 氏、女性、1973 年生まれ、富山市出身、18 歳からは県外に在住。

注 2 調査は 2021 年 9 月から開始。新型コロナウイルス対策のため、全てオンライン形式で行った。

本節では母音語幹と (C)VQ 語幹と (C)VN 語幹を取り上げ、これら以外は第 3.4 節で取り上げる。これらのアクセントは以下の (8) に示す通りとなる。(8) の③から⑥に示すように、同方言では T 系接尾辞接続時、基本的に語幹末自立拍に下がり目が置かれる。しかし、表中太四角内の①と②に示した単音節の母音語幹と単音節の (C)VQ 語幹では語幹末自立拍ではなく接尾辞初頭拍に下がり目が置かれる。

この接尾辞初頭拍の下がり目による高低音調は /-ta/, /-te/ などでは終助詞や接続助詞などの接語がさらに後続することで観察される。また /-tara/ では /-ta/ から /ra/ にかけて高低音調が観察される。

(8) T系接尾辞が接続した各語幹の語例と下がり目の位置、ピリオドは音節境界を表す。

i. 母音語幹	子音語幹	
	ii. (C)VQ 語幹	iii. (C)VN 語幹
単音節語幹 /mi-/ 見る ① mi.-ta'. 接尾辞初頭拍	単音節語幹 /sir-/ 知る ② siQ.-ta'. 接尾辞初頭拍	単音節語幹 /yom-/ 読む ③ yo'N.-da. 語幹末自立拍
多音節語幹 /tabe-/ 食べる ④ ta.be'-.ta. 語幹末自立拍	多音節語幹 /sodat-/ 育つ ⑤ so.da'Q.-ta. 語幹末自立拍	多音節語幹 /asub-/ 遊ぶ ⑥ a.su'N.-da. 語幹末自立拍

注3 /-te/ は継起を表す際にはここに示したアクセントになるが、依頼を表す際には平板調になる。

また小西 (2016: 94) も述べるように、②の例外として /or-/ “おる (居る)” は語頭に下がり目が置かれる (/o'Q-ta/ “おった”)。

注4 T系接尾辞以外として、非過去形接尾辞 /-ru/ のアクセントについてここで簡潔に触れておく。

/-ru/ では語幹の種類に関係なく語幹末自立拍に下がり目が置かれる (mi'-ru “見る”、si'r-u “知る”、tabe'-ru “食べる”、soda't-u “育つ”、asu'b-u “遊ぶ”)。

3.3. アクセント規則

(8) に対するアクセント規則を考えようとすると、例えば以下のようなもの考えることができる。

(9) 富山市方言の T系接尾辞接続時の動詞アクセント暫定規則 (のちに棄却する。)

語幹が (C)V または (C)VQ という単音節である場合、T系接尾辞の第1拍目に下がり目を置け。それ以外では語幹末自立拍に下がり目を置け。

例 ①、②：規則の波線部適用

① /mi-ta/ → /mi.-ta.'/, ② /siQ-ta/ → /siQ.-ta.'/

③～⑥：規則の二重線部適用

③ /yoN-da/ → /yo'N.-da./, ④ /tabe-ta/ → /ta.be'-.ta/

⑤ /sodaQ-ta/ → /so.da'Q.-ta./, ⑥ /asuN-da/ → /a.su'N.-da./

しかし、この規則を立てた場合、以下のような疑問が生じる。

(10) (9) の規則に対する疑問

a. ①と②はなぜ同じ振る舞いをするのか、すなわち末子音の有無という点で音節構造が異なる (C)V 単音節語幹と (C)VQ 単音節語幹はなぜ同じ振る舞いをするのか。

b. ②と③はなぜ異なる振る舞いをするのか、すなわち (C)VQ 単音節語幹と (C)VN 単音節語幹はともに尾子音をもち音節構造が同じであるにも関わらずなぜ異なる振る舞いをするのか。

ここで、同方言の促音は動詞アクセントにおいては拍を担っていないと考えたと、以下の (11) のように簡潔な規則を提案することができ、さらに (10) に示した疑問にも以下の (12) に示すように回答することができる。

(11) 富山市方言の T系接尾辞接続時の動詞アクセント規則 ((9) は棄却しこちらを提案する。)

語幹が1拍である場合、T系接尾辞の第1拍目に下がり目を置け。それ以外では語幹末自立拍に下がり目を置け。

例 ①、②：規則の波線部適用

① /mi-ta/ → /mi_μ-ta_μ/

② /siQ-ta/ → /si_μQ-ta_μ/：促音が拍を担っていないと仮定すると、/siQ/は2拍ではなく1拍である（/si_μQ_μ/ではなく/si_μQ./）。

③～⑥：規則の二重線部適用

③ /yoN-da/ → /yo_μ'N_μ-da_μ/、④ /tabe-ta/ → /ta_μ.be_μ'-ta_μ/

⑤ /sodaQ-ta/ → /so_μ.da_μ'Q-ta_μ/、⑥ /asuN-da/ → /a_μ.su_μ'N_μ-da_μ/

(12) (10)の疑問に対する回答

a. (10a) ①と②はなぜ同じ振る舞いをするのか、に対する回答：①と②はともに語幹が1拍という点で共通点があるため。

b. (10b) ②と③はなぜ異なる振る舞いをするのか、に対する回答：②は1拍（/si_μQ./）である一方③は2拍（/yo_μN_μ/）であり、拍数が異なるため。

なお、促音が1拍を担わないと考えると、⑤の /so.da'Q-ta./ の /Q/ も拍を担わないことになる。しかし、そのように考えても語幹は1拍ではないため、規則の二重線部により語幹末自立拍である /da/ に下がり目が置かれ正しいアクセントパターンが得られる。

このように同方言の動詞アクセントにおいて促音は蜃気楼のように、存在しているけれども、実態を伴っていない（1拍を担っていない）。このような「蜃気楼促音」を仮定することでアクセントパターンを簡潔に説明することができるのである。

3.4. 母音語幹、(C)VQ語幹、(C)VN語幹以外の語幹にT系接尾辞が接続した際のアクセント

本節では前節までで扱った3つの語幹以外、すなわち変格活用語幹と末尾が /w, k, g, s/ である子音語幹にT系接尾辞が接続した際のアクセントについて扱う。そしてそれらのアクセントも(11)の規則によって説明できることを示す。まず変格活用語幹では /ki-ta/ “来た”、/si-ta/ “した” のように接尾辞初頭拍に下がり目が置かれる。これは音節構造が /mi-ta/ “見た” などの(C)V単音節語幹と同じであるため、(11)の規則の波線部によって説明できる。次に末尾が /w, k, g/ である語幹、および末尾が /s/ である語幹のうちイ音便が生じるものでは以下の(13)に示すように語幹末から数えて2拍目に下がり目が置かれる。これは音便によって生じた語幹末母音が二重母音や長母音の後部要素、すなわち特殊拍であると考えれば(11)の規則の二重線部によって説明できる。

(13) /kaw-/ “買う” : /ko_μ'o_μ-ta_μ/ “買った”、/kak-/ “書く” : /ka_μ'i_μ-ta_μ/ “書いた”、
/kog-/ “漕ぐ” : /ko_μ'i_μ-da_μ/ “漕いだ”、/das-/ “出す” : /da_μ'i_μ-ta_μ/ “出した”

最後に末尾が /s/ である子音語幹のうち /i/ の挿入のみが起きる語幹であるが、こちらでは以下の(14)に示すように語幹の拍数によってパターンが分かれる。このタイプの語幹では語幹末の /i/ が無声子音に挟まれ無声化するため、(14)ではそれを反映した表記にしている。また、(14)のようなパターンは /ot_i-ta/ “落ちた”、/oQkot_i-ta/ “落っこちた” などの無声化した /i/ をもつ母音語幹でもみられるため、(14)のパターンは無声化母音が生じる語幹に共通して現れるといえる。この(14)に示すパターンに無声化が関わることは小西(2016: 94)でも述べられている。

(14) a. 語幹が 2 拍：揺れあり、語幹末から数えて 2 拍目、あるいは接尾辞初頭拍に下がり目

例 /kosj-ta/ “越した” : /ko'sj-ta/ ~ /kosj-ta'/

b. 語幹が 3 拍以上：語幹末から数えて 2 拍目に下がり目

例 /tubusj-ta/ “潰した” : /tubu'sj-ta/

/ko'sj-ta/ と /tubu'sj-ta/ は無声化により下がり目が語幹内でずれた結果現れたと考えられる。一方の /kosj-ta'/ は無声化に加えて /sj/ の拍性も消失したと考えれば /kosj/ は 1 拍ということになるため、(11) の規則の波線部適用により生じたと考えることができる (/ko_μ.sj_μ-ta_μ/ → /ko_μ.sj_μ'-ta_μ'/)。このように考えると /tubu'sj-ta/ でも拍性が消失しうることになるが、そうなったとしても語幹は 1 拍にはならないため、(11) の規則の二重線部が適用され (14b) のパターンのみが現れることになる (/tu_μ.bu_μ.sj_μ-ta_μ/ → /tu_μ.bu_μ'sj_μ-ta_μ'/ : 拍性が消失しても語幹は 2 拍)。以下の (15) にこれらの派生を示す。このように無声化母音を含む拍も拍性をもたない（失いうる）と考えることですべてのアクセントパターンを説明することが可能になる。ただしこの説明の場合、/si/ への下がり目付与後、/si/ の /i/ が無声化したためにアクセントが移動したと考えるのではなく、(15) に示すように無声化した後に一度下がり目を無声化母音に置いてから移動が生じるという外在的順序付けをしなければならない。下がり目付与後無声化が起きると考えてしまうと /ko_μ.sj_μ-ta_μ'/ が導けないためである。この順序付けの妥当性の検討も含めた規則の精緻化は今後の課題としたい。

(15) /ko_μ'sj_μ-ta_μ'/, /ko_μ.sj_μ-ta_μ'/, /tu_μ.bu_μ'sj_μ-ta_μ'/, /tu_μ.bu_μ.sj_μ-ta_μ'/ の派生

i. 無声化	/ko _μ .sj _μ -ta _μ /	/ko _μ .sj _μ -ta _μ /	/tu _μ .bu _μ .sj _μ -ta _μ /	/tu _μ .bu _μ .sj _μ -ta _μ /
ii. 無声化母音の拍性の随意的消失	拍性維持	拍性消失	拍性維持	拍性消失
iii. (11) によるアクセント決定	二重線部適用	波線部適用	二重線部適用	二重線部適用
iv. 無声化母音からのアクセントの語幹内での移動	/ko _μ 'sj _μ -ta _μ '/	移動なし	/tu _μ .bu _μ 'sj _μ -ta _μ '/	移動なし
v. i ~ iv を経た形式	/ko _μ 'sj _μ -ta _μ '/	/ko _μ .sj _μ -ta _μ '/	/tu _μ .bu _μ 'sj _μ -ta _μ '/	/tu _μ .bu _μ .sj _μ -ta _μ '/

4. まとめと今後の課題

本発表では富山市方言を対象とし、動詞に現われる促音が拍を担っていない蜃気楼促音と考えることで同方言の動詞アクセントが簡潔に説明されることを示した。今後の課題としては、第 1 節で述べた Hayes (1995) と Zec (2011) にも共通する拍性の有無の証拠の提示、第 3.4 節で述べた規則の精緻化などがあるが、この他に、富山市方言では他にどのような語群で蜃気楼促音が現れるのか、という課題が残されている。(1c) にも示したように Hayes (1995) では尾子音が拍性をもつかどうかは一言語内でも環境によって異なるとされている。これを踏まえると、動詞同様蜃気楼促音が現れる語群、および動詞とは異なり蜃気楼促音が現れない語群の両方が富山市方言にはありうることになる。この整理を今後行う必要がある。発表者の調査の限りでは数詞+助数詞に現れる促音は蜃気楼促音であると目される。数詞+助数詞では助数詞の前が単音節の (C)V(Q) であるかどうかでパターンに差異がみられ、(C)V と (C)VQ の共通点が窺えるためである。

(16) 数詞+助数詞（ここでは /satu/ “冊” を例にとる。）

a. 数詞が単音節の (C)V(Q) : 助数詞側に下がり目。例 ni-sa'tu “二冊”、zyuQ-sa'tu “十冊”

b. それ以外 : 数詞側に下がり目。例 nana'-satu “七冊”, yo'N-satu “四冊”、kyu'u-satu “九冊”

注5 ただし、(C)VN に関しては、数詞側に下がり目が置かれるのは /yoN/ “四” だけであり、/saN/ “三”、/seN/ “千”、/naN/ “何” では /saN-sa'tu/, /seN-sa'tu/, /naN-sa'tu/ のように助数詞側に下がり目が置かれる。(1) も踏まえるとこのことはこれらの撥音も拍を担っていない可能性を示唆する。

その一方で、外来語に現れる促音は拍を担う、すなわち屢気楼促音ではないと目される。同方言では3拍の外来語はテレビ、タオルのように基本的に中高型になる。その一方でルッコラのように促音を含めて4拍の外来語は中高型にならず頭高になる(ル'ッコラ、*ルッコ'ラ)。このことはルッコラの促音が拍性を有しており、全体が3拍ではなく4拍であるとみなされていることを示唆する。

今後これらの課題に取り組み、富山市方言の音韻論の詳細、および他方言との異同を明らかにしたいと考えている。

参考文献

小西いずみ (2016) 『富山県方言の文法』 東京 : ひつじ書房.

平山輝男 (編) (1960) 『全国アクセント辞典』 東京 : 東京堂出版.

平山輝男 他 (編) (1998) 『富山県のことば』 東京 : 明治書院.

Hayes, Bruce (1995) *Metrical Stress Theory*. Chicago: University of Chicago Press.

McCawley, J. D. (1968) *The phonological component of a grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.

Zec, Draga (2011) Quantity-sensitivity. In: Marc van Oostendorp, Colin J. Ewen, Elizabeth Hume, and Keren Rice (eds.) *The Blackwell Companion to Phonology, Volume II Suprasegmental and Prosodic Phonology*, 1335-1361. Malden, MA: Wiley-Blackwell.

謝辞

本研究は文部科学省卓越研究員事業、および第13回北陸銀行若手研究者助成金の支援を受けたものである。本発表のデータの収集には(7)に示した3名の方言母語話者にご協力いただいた。また、(7)の3名に加え調査にあたっては富山県砺波市出身のD氏(1956年生まれ、男性、26歳から富山市在住)にもご協力いただいた。今回は富山市方言としたためD氏については(7)に記載しなかったが、本発表で扱ったデータに関していえばD氏と他3名の間に相違はなかった。この4名の方々に深く感謝申し上げます。